

08・二度目のデートにお誘い

『07・耳元で密着吐息喘ぎされながら、はじめての『攻めセックス』する』から数時間後。
とある年の夏。七月二十八日（火）十八時半ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は雨。かなり激しく振っている。気温は二十三度程度。
少し湿度は高いが、心地よい夏の昼間。

場所は、民宿内、弥映の部屋。

主人公と弥映、一緒に布団に入って、ぼんやり外の景色を眺めている。

もう触り合っていないのに、それでも夢見心地だ。

セックスしていなくても、心がつながっている気がする。

SE1 雨の環境音

【トラック06と07のSE1と同じ音】

【途中から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

【20―28秒ほどまで流してセリフ】

【その後、トラック終了まで、もう一段階小さめの音にして流し続ける】

※同じ音をループさせつつ、『トラック06・07・08が完全に同じ始まり方である』と言うのを避けるために、別の位置から流す形で始めていたみたいです※

● 中央

「外の光景を眺めながら」

……まだ降ってる。明日は晴れるみたいだけど。

【少し間をあけてから】

そろそろ夕飯の時間だね。着替えないと」

主人公、そう言って立ち上がろうとする弥映にしがみつく。

夕食は十九時からのはずだ。まだ時間がある。

まだ弥映と離れたくない。もう少しこうしていたい。

SE2 主人公が弥映に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「急に抱きつかれて驚く」
わ。

「すごく嬉しい。」

『ご飯ギリ』は『ご飯の時間ギリギリまで』という意味
ふふふふ。ご飯ギリまでくっついてたいの？」

〈主人公〉

「うん……♡ まだ時間あるし、いいでしょ？
まだ弥映ちゃんとかくっついてたいよ」

●中央 至近距離

「※マークまで、ドキドキしながら本音を伝える。
少し声が小さくなる」
うん。あたしも……。

あたしももうちよつとだけ……こうしてたい。

【少し間をあけてから】

ありがとう。

あのね……今日、すごい気持ちよかったよ。

ありがとう……」※

〈主人公〉

「……！」

主人公、弥映の言葉が嬉しくてたまらない。

食い気味に返事をする。

〈主人公〉

「私も……！ 私、すごい気持ちよかった……」

弥映ちゃんといっぱいできて、嬉しかった……」

主人公が興奮気味に伝えと、弥映が泣きそうな顔で笑う。

胸が締め付けられて、そのまままた襲いかかりたくなかったが、そうする前に弥映が話し出した。

8秒ほどの沈黙。

●中央 至近距離

「ドキドキしながら切り出す」

そうだ。あ。あのさ。ちよっと聞きたい事あるの」

〈主人公〉

「なあに？」

抱き合ったまま、弥映が質問してくる。

もちろん、主人公は何でも答えたい気分だ。どんと来いである。

もう弥映に知られて困る事など、何もない。

もし弥映が少しでも何か不安なことがあるならば、主人公はもっと全部見せて、教えて、弥映に安心してもらおうと思った。

だが、その質問内容は、主人公が想像としたものとは少し違っていたようである。

●中央 至近距離

「ドキドキしながら切り出す」

もしわかるなら、なんだけど。

この辺で、服とか買えるところ、知ってる？

【少し間をあけてから】

その、あたし、ほんとに無計画で来たからもう替えが無くて。

洗濯機貸してもらえるみたいなんだけど、手持ちじゃ心許ないっていうか……」

〈主人公〉

「……………」
♥

主人公、弥映のその言葉が、とても嬉しい。

それは『明日以降もここに滞在する』という意思表示であると思ったからだ。

もちろん主人公は、明日も弥映がここにいてくれると信じていた。いや、信じたかった。だが、今の二人の関係はとても儚い。

たとえば『明日は何をしようか？』なんて、小さな質問をしただけで、今の空気を壊してしまいそうで……恐ろしかったのである。

〈主人公〉

「じゃあ明日、お買い物デート行こっか」

●中央 至近距離

「期待して。」

会話の流れから『明日、一緒に買いに行こうか』という意味で言っていると察する。しかし、それでもまだ確証が持てず、ドキドキしている」
えっ?」

だから主人公は、勇気を出した。

弥映から『明日もここにいる』という回答に等しいものを得られたから、次に何かするのは自分だと思ったのだ。

もしかすると、弥映は一人で行きたいかもしれない。

でも、断られる事を恐れて『じゃあ行ってらっしゃい』と言って終わりにはしたくなかった。

『一緒にいたい』という気持ちは自分勝手なものだから、いつも迷惑行為と隣り合わせだ。

だから伝えるのは、いつも怖い。
でも、言わずにいて誤解されるのは、もっと嫌だと思った。

〈主人公〉

「バスに乗って行けるところになら、ショッピングセンターがあるよ。
明日は一緒にそこに行ってみない？」

●中央 至近距離

「すごく喜んで。」

『自分達はセックスだけの関係』じゃないと思えて、すごく嬉しい』
いいの？」

主人公がショッピングセンターについて説明する前に、弥映が食いつく。
さっきの主人公よりも食い気味に、いつもより早口に、目を輝かせて聞いてくる。

弥映の、質問を質問で返す癖。
こちらから提案した事にすら、許可を求めてくる事。

それはきつと、弥映の自信のなさの表れだ。

主人公は正直なところ、それをなんだかずるいなと思う事はある。

『二度も言わせるなんて』とか『年上なんだから、もつと引っ張ってくれたっていいのに』なんて思う事もある。

でも、弥映は言った。『自分達は対等だ』と。

だから主人公は大きな声で『その通りだ』と『ずるいところも許すよ』と言う事にした。弥映という時はもう、お互いの年齢は忘れる。

『年上のお姉さんの弥映ちゃん』じゃなくて『自分の恋人の弥映ちゃん』として接する。そう決めたのだ。

それに、弱くてずるいのは、自分も同じだ。

〈主人公〉

「……まあ、田舎クオリティだけど、その分安いし。

そこのコンビニよりは揃うと思うよ」

こうやって、早速マイナス面を説明して、予防線を張りまくっている。

●中央 至近距離

「※マークまで、すごく喜んで」

行く……！ 連れてって。

お買い物デート、する♥」※

〈主人公〉

「ただし、バスで、だけど……。しかも、ちよつとかかっちゃうけど」

●中央 至近距離

「すごく嬉しくて声が弾む。また、少し早口になる。」

主人公にデートに誘われて嬉しい。

だが、主人公がなぜか自信なさげなのは気づいているものの、その理由はわからない」

※はしやぎつつも、あまり大きな声にはならないようにお願いします※

いいよバス。バスで行こ。あたしバス大好き。

バス乗って行けるとこになら、服とか買えるところあるんだ？」

だって、弥映のような美人で、おしゃれで、都会的な女性を案内するには、田舎のシヨツ

ピングセンターは心もとない。喜んでもらえるか不安なのだ。

でも、主人公はそこが嫌いじゃないし、むしろリラックスできて気に入っている。たとえば数日前、一人で出かけた時に入ったフードコート。

そこは広い敷地に明るく日が入って、人があんまりいなくて、広い机を独占できて、割と新しいから綺麗で、すごくいいのだ。

あれを弥映も気に入ってくれたら、素敵だと思う。

どこにでもあるものかもしれないけど、入っているのはチェーンのお店ばかりだけれど。一緒に『なんか落ち着くね』『ゆっくりできるね』『安くておいしいごはんっていいよね』と言えたら、きつと幸せだと思ったのだ。

〈主人公〉

「うん……♥ バス停自体は近いから。行こう？」

明日はお昼もそこで食べようよ。

伯父さん伯母さん達には、先に言っておけば大丈夫だから」

● 中央 至近距離

「少し間をあけてから。嬉しくてたまらない。」

心のどこかで『自分達はセックスだけの関係だ』と思っていたが、そうじゃないと思える事が嬉しい」

ふふふ。二回目のデートだ。楽しみだね。

【少し間をあけてから。

とても嬉しくて、はしゃぐ】

あー何着てこう♥

【『悩んだところで、悩めるほど選択肢はない』

と自分つつこみをしつつも、やはりテンションが高い】

いや、もう選択肢ないんだけど。

【甘えた声で、すごく嬉しそうに】

とにかく嬉しい。ありがと♥

【有頂天で。顔中に、ランダムに、感謝の気持ちのキスを四回する】

ん♥　ちゅっ♥　ちゅっ♥　ちゅ♥　

だから主人公は、弥映がのってくれて、すごく嬉しい。

明日、実物を見せたらがっかりさせてしまうかもしれないが……。

それでも、『明日が楽しみ』と言ってくれる事自体が、とても嬉しかったのだ。

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。

おずおずと。応じてもらえるか不安」

あ、後（あと）、後（あと）さあ……」

〈主人公〉

「うん？」

しかし、話はこれで終わりではないようだ。

弥映は、まだ主人公に聞きたい事があるらしい。

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。

※マークまで、おずおずと。応じてもらえるか不安」

今日は、一緒にお風呂も、入ろうよ。

【ちよつと早口で】

普通に。普通に入るだけなら、大丈夫でしょ？」※

〈主人公〉

「……………」

その提案がまた嬉しいものだったから、主人公はまた勇気を出せる。
弥映の理想の恋人になりたい。
そんな気持ちを、もっと実行に移せるようになる。

〈主人公〉

「洗ってあげるね。身体」

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。」

嬉しすぎて、戸惑っている」

あ……♡ いいの？

【少し間をあけてから】

身体、洗ってくれんの？」

〈主人公〉

「うん。髪も洗って。乾かしてあげる」

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。」

嬉しすぎて、戸惑っている」

髪も？」

〈主人公〉

「髪も。それから、ベビーパウダーもはたいてあげるよ。全部してあげる。だから、一緒に入ろうよ」

●中央 至近距離

「甘えた声で。ものすごく嬉しい」

そんなにしてくれんの……？」

そんな主人公の言葉に、弥映は戸惑っているようだ。相変わらず、返ってくる言葉は全部疑問形である。

それはとてもまだるっこしくて、そのくせとても甘い。

ずっと質問されなくなる。

延々と『そんなに愛してもらえるのか』と聞かれて『はい』と答え続けなくなる。

〈主人公〉

「……うん。それからね、寝る時も、ずっと手繋いでるから。

朝まで、ずっといちやいちやしてようね」

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。

嬉しすぎて、ぐすつと鼻をすする」

そんなのあたし、お姫様じゃん」

〈主人公〉

「違うの？」

それでも、これと言うのは怖かった。

格好つけすぎている気がするし、弥映はお姫様かもしれないけど、自分がそれに寄り添う存在かどうかは、自信が持てなかったからだ。

『もしかすると、自分一人で盛り上がっているだけかもしれない』という不安は、常にちらつく。

求めすぎて、気味悪がられてしまったら。

そのせいで気持ちが冷めて、この関係が終わってしまったら。

そんな恐怖を打ち消せるほど、主人公はまだこの関係に自信が持てない。
でも……。

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。」

嬉しすぎて、言葉を失う」

……っ ♡

「※マークまで、少しぶっきらぼうな言い方になる。

照れて、恥ずかしくて、もじもじと」

だったら、あんただって、お姫様だから。

あたし、あんたがしてくれるのより、もっとすごい、するから。

※

「少し間をあけてから。頑張って勇気を出す」

嬉しい。ほんとにありがとう。

「少し泣きそうになって」

こういうのが幸せって言うのかな……」

〈主人公〉

「そうだよ。これからずっと、こういうのが続くの」

『『こういうのが続く』のを実現できるのか。

それを一緒に『可能なのか』と不安に感じながら。

それでも主人公は頑張りたいと思った。

それは、弥映が好きだから。

その結果今一生分の勇気を出して、ストックが完全に尽きてもいい。
今発揮できないエネルギーなら、そんなもの一生使い物にならない。
だから全部使う。そう思ったのだ。

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。

嬉しすぎて、言葉を失う」

……これからずっと？

これからずっと、あたし、あんたの彼女で、お姫様でいられるの？」

〈主人公〉

「そうだよ……♡」

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。」

嬉しすぎて、言葉を失う」

そっ、か」

●●左 ささやき ※マークまでささやく

「少し不穏な含みを持たせて」

ありがとう」※

少し淋しい響きで、弥映が耳元にささやいた。

それが何を意味するのか、主人公にはわからない。

一秒前まであんなに気持ちが高揚していたのに、一瞬で不安になる。
あらぬ事を想像して、深読みして、胸が痛くなる。

でも。

●中央 至近距離

「全部、すっごい楽しみにしてる。

【唇に、軽く一回だけキスする】

ちゅ♡」

それでも、少なくとも、きっと明日は一緒だ。今、約束したのだから。

●中央 至近距離

「大好きだよ」

だから主人公は……この言葉を信じる。明日も自分は弥映の恋人で、弥映と一緒にいられる事を、信じる。

ここでフェードアウトして終了。